



Title	自然災害復興と観光創造
Author(s)	室崎, 益輝
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 141-145
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61210
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS9_13murosaki.pdf



自然災害復興と観光創造

室崎 益輝

兵庫県立大学防災教育研究センター長

1. 1 日目のコメント

私からは、復興という視点から観光をどのように考えればよいのか、という点についてお話しさせていただきます。そのためにはまず、「復興はどうあるべきか」を考えることがとても大切で、そこから出てくる重要なテーマは、まず経済、そして文化なのです。経済と文化に復興の議論をブレイク・ダウンして、経済と文化の接点で観光は生まれてくるのです。こうした観点から復興から観光までを繋げて考えるというスタンスで、今日は皆さまのお話を聞かせていただきました。

では、復興とは何でしょうか。この点を話すと永遠に時間がかかりますが、一番重要なことは、その時代、その社会が持っている歪みが災害で表に出てくるといことです。災害が起きなくても将来起きるかもしれないような歪みが出てきます。その歪みに向き合い、正していくことが復興では重要です。この歪みの 1 つが文化の衰退です。その衰退と向き合うこと、本当の文化がしっかり育っているのかを考えることが、観光にとっても非常に重要なことであろうと考えています。

そのためには、Reconstruction ではなく Revitalization が求められます。つまり、モノをつくるのではなくて、命を吹き込むということです。その意味ではルネッサンスという言葉の方が近いように思えますが、人類が生きていく力をどのように取り戻すか、あるいは、より伸ばしていくのかという視点で考えなくてははいけません。

ここで思い返すのは、ヒトラーが他民族を絶滅させようとした時にとった行動は何であったかということです。1 つは、アウシュビッツ収容所に送り込んで命を絶つことです。しかし、それだけではヒトラーは満足できなかったのです。その方法では、その民族の血は絶やせないということをよく分かっていた。そこで何をしたかという、その民族のありとあらゆる文化財、建物、まちを破壊し尽くしました。しかし逆に、今度はナチスの支配下から解放されたが人々が新しいまちを創る時にどうしたか。今度は、壊れたレンガを 1 つ 1 つ取ってきて、元のように町並みや建物を造ったのです。これは何を意味しているのかというと、命だけでは人間は生きていけないのだと。そこに文化がないと、人間は生きていけないのだということです。この点はとても重要なことだと思います。

このように考えた時に、文化とは何でしょうか。それにもう 1 つ、今日の研究会のキーワードである「宝」を付け加えてお話しします。宝を探すということは、その地域にしかないもの、あるいは地域が誇りにできるもの、地域の本当の魅力や生きがいなどの根底にあるものを、もう一度地域の人たちが再確認するということだろうと思うのです。私はいつも東北の人たちに言っているのですが、東北の人たちは「防災」という言葉を繰り返し

言うのです。しかし私は大嫌いで、防災の科学者から見ると、あれほどまやかしの「防災」はないと考えています。海岸を 20 メートルの堤防で囲うことが本当に防災なのか。そのことによって、もっと大切な文化、暮らしや生態系をすべて失います。このように考えると、安全は必要条件であり、決して疎かにはできないものですが、十分条件ではありません。我々は必要十分条件をしっかり確保することが必要になります。その十分条件を考える際には、アメニティやコミュニティが大切になってきます。その中で文化というのがとても重要だということです。安全を考えていく時には、パンだけで生きていくのではありません。パンというのは経済で、お金やモノなど物的なものですが、こうした経済だけでは生きていけません。「ひとはパンのみに生きるものにあらず」という言葉には、文化、精神的なもの、誇りなどが同時に含まれているのです。

ここで観光の意義が生じてきます。観光を復興の中心に据えるとは、いったいどのような意義を持つのでしょうか。ひとつは精神的なエンジンです。精神的なものの中にはもちろん地域の誇りもありますが、今日のお話を踏まえると、外から来た人との繋がり、地域の連帯感、それを探し出すプロセス、今日のご質問の中でも出てきた心の問題、こうしたキーワードはすべて含まれます。しかし、だからといってパンがないと生きていけません。ですので、第 2 に経済的なエンジンも必要です。経済的な基盤をしっかり構築しないといけません。今日のご発表を聞く中では、風土の商品化というのはなかなか良い言葉だと感じました。観光を基軸にし、ツーリズム産業として経済的に飛躍させていくということです。

なぜ観光を復興の中心に据えるべきなのか。それは世界の産業構造が変わってくるなかで、最後の産業が観光だと私が考えているからです。豊かになった時代にその豊かさを共有する際には、物質的なものではなく、精神的な豊かさを共有したい、獲得したいと思うところに一つの課題があります。そこで観光を中心に据えることによって、人の繋がりも形成され、産業連関、経済的な波及が起きてさまざまなところに富が回っていきます。また、住宅、環境などの復興の課題が、観光を基軸とすることによって連関していき、答えが出てくるような側面もあります。

観光の意義に話を戻しますと、第 3 に教育的エンジンがあります。観光によって教育が進むと私は思います。世界中に震災ミュージアムが出来てきて、神戸にも「人と未来防災センター」という施設があります。今日のご発表の中にも学ぶ防災という言葉がありました。防災は教育の力にもなるのです。精神面、経済面、教育面それぞれについて、観光は復興の中でとても大きなエンジンになると位置づけることができます。これがひとつの答えです。

今日のお話を聞いていると、人の繋がりのお話が何度も出てきました。まさに観光を創り出す人たちは誰なのか。これはなかなか難しい問題で、一人ひとりというお話もありましたし、ガイドは支援者なのか演出者なのかよく分かりません。しかし、やはり地元でガイドをする、地元のことを説明できる人が必要ですので、まずは観光を創り出す人がいなか

ればなりません。そして次に、生み出された文化が享受されます。先ほど、支援する人／支援される人の二分化は良くないというお話があり、確かにお祭りなどは皆で一緒に創らないといけないのですが、しかしここでは被災地の中と外を繋ぐ人が必要になります。観光客、あるいは被災地のものを全国的にインターネットで購入できるシステムなどが必要です。この繋ぐ人を、観光業者という言葉で表してよいのでしょうか。観光業者の役割は大きく、またメディアの役割も大きいものがあります。最後はそれを支える行政が必要ですし、行政だけではなく研究者も含めてさまざまなサポーターがいらないといけません。こうした人たちが協働する中で観光を創り上げていくことがとても大切かと考えています。

最後に、1925 年の北但馬地震からの城崎市の復興を事例としてお話しします。私は「三大復興」と言いますが、1925 年の城崎の大火、1934 年の函館の大火、そして戦後の広島復興が「日本三大復興」と呼べる素晴らしい復興だと考えています。今日は北海道庁の赤レンガ庁舎を見てきましたが、昔はそこに公文書館がありました。私が 30 年ほど前に函館大火の研究をした際には、その公文書館に籠って議会の議事録をすべて読んだのを思い出しました。

城崎は、1925 年の地震による火災ですべて焼けてしまったのです。しかし、焼けた後にまた木造 3 階建ての町並みをつくったのです。その理由は、全町民で何度も議論した結果、城崎の生きていく道は温泉しかないのだと彼らが理解したからです。温泉街の佇まいをコンクリートで変えてしまえば、お客さんが離れてしまいます。東北の人たちに私が話しているのは、防災を理由に山に上がってしまって本当によいのかということです。あの綺麗な北山崎の景色を捨てていいのでしょうか。景色も取りながら安全も取るような、両立させる答えを見出さないとはいけません。城崎はそれを見出しているのです。建物は木造 3 階建てにしたのですが、火災に強い町並みをつくりました。防災だけではなく、アメニティなどを非常に重視しています。こうした議論をする上では、観光や地域経済が中心的な話題になるのでしょうか。城崎の大谷川の護岸にあるひとつひとつの石は、地震で壊れた玄武洞という天然記念物から皆で拾ってきて積んだもので、これは非常に綺麗な景観を形づくり、これで今の城崎の温泉が賑わっています。このように、復興においては観光や地域経済のことを考えないと上手く進みません。

ご参考までに、台湾はツーリズムによる復興に熱心に取り組んでいます。1999 年の地震で被害を受けた捕里（プーリー）という町には、現在では非常に多くの観光客が来います。ここでは、町を訪れた人たちに食事をしてもらうのです。農家レストランで、農家のおかみさんたちが一生懸命自分たちで育てた野菜の料理を作り、それによって地域が経済的に発展しています。こうした、地域経済の活性化と観光が復興の推進になったという事例があります。

改めて結論を申し上げると、観光を中心に据えて復興を考えなくてはいけないということです。以上でコメントを終えます、ありがとうございました。

2.2 日目のコメント

では、今日のみなさまの話聞いて感じたことを短くお話しします。

1 つは、先ほどの語り部さんの話、それから遺構を残すという話です。まず、なぜ遺構を残すか、なぜ語り継ぐかということは、やはり、次に伝えて二度と同じ悲しい思いをしないということなのですが、同時に、遺構を残すこと、語り継ぐことというのは被災者自身が自分の悲しみを乗り越えるプロセスなのです。いわゆる相対化し、客観的に見ることによって、その罪悪感のようなもの、後ろめたさ、いろんなものを抱えているなかで、でもそれはそうではないのだ、というところをしっかりと見つめるためには、自分の言葉で語ることも必要ですし、あるいはこれを見たら嫌なことを思い出すなと思っているものを、遺構として見せることによって、他の人に与える影響を感じとることができます。人に語り人に見せることによって、被災者自身が立ちあがっていくプロセスのために、その遺構や語り部というのは、実は被災地における観光のきわめて基本的な要素なのです。

それは、光って何かということなのです。かつて聞いた石森先生の話で、僕は丁寧に光を見ることなのだと、昨日のことのよう鮮明に覚えています。それを教えていただいて、光って何かっていうことを改めて考えます。昨日、それを私はお宝だとか、資源だとか素晴らしい経験だとかというものだと言いました。光は、そうしたものに触れることで遠くが見えるようになる、あるいは心が暖かくなるといった、ひとつの作用を持っていると思います。まさにその地域の人たちがひとつになって頑張っている姿も光だし、その悲しい体験も光なのです。そういうものが、それにみんなで触れる、それに触れることによって、来た人がまた心があらわれて暖かくなるというプロセスになるわけです。ですから、要するに観光というのは、ただ遊ぶというだけのことではないのです。もちろん遊ぶということは重要で、僕は、究極の防災は遊びだと言っています。遊びの心、心のゆとりがなかったら、そういうものは絶対意味がないのです。基本は遊びなのです。

しかし、その遊びの中身がずいぶん違っていて、いろんな遊び、学ぶ遊びなどあります。先ほどの山下さんのご報告の中で、語り部さんが「観光なんかして」と非難されるというお話がありましたが、いろんなことを聞くということは勉強しに行くことなのだから、堂々と胸を張って行けばいい話です。いろんなところの知恵だとか、経験を聞きに行く。だからその観光というものを、もっとポジティブに積極的に捉えていくことが必要です。ついつい、われわれ観光というと団体旅行みたいなイメージをもってしまう。僕は、それはそれでいいと思っているのですが、ただやっぱりもっとその奥深いものだということを伝えたいし、分かってもらいたい。そういうところから、文化だとか地域だとかの復興を考える時に、被災者がもっと自分たちの共有財産として誇りを持って、自分たちはこんな素晴らしい神楽を持っていたのだとか、こんな素晴らしい伝統行事を持っていたのだと、この地域はこんな素晴らしい地域だったのだということを再認識することが、僕は光を発見し、光を伝えようとする原点になっていると思います。

少し長くなりますが、いろんなことを全部込めてお話し申しあげています。今日はそのように感じました。僕は、観光について何も知らずに来ましたので、釈迦に説法ということとは分かっています。皆さんは観光を研究しているのですが、観光というのも、ややもすると何かすごくいろいろあるということだと思うのです。いろいろあって、じゃあ、みんなでわいわい言い合ってどんちゃんさわぎをするのも、お酒を飲むのも僕はとてもいいことだと思います。

最後にひとことだけ言わせて下さい。阪神大震災の時に、みんな来た人が神戸でお酒飲まないで、大阪に戻ってから飲むのです。あるいは観光に行く事を否定的にとらえて、「被災地が大変なのになんでお前たち行くんだ」という風に言うのです。僕は、「神戸に来てどんちゃん騒ぎをして下さい。どんちゃん騒ぎをしてくれた方が結果的に神戸の経済が潤うからいいんですよ」と言っていました。ただ実際にはそうも言えないので、どんな時であれ、そこに来てそこで見たことが大事なのです。被災地を見てもらうとそのすべては伝えられなくとも、何かを感じてもらえます。その何かがとても重要なのです。僕はだから、その震災遺構の前でピースをしてもいいと思います。ただ注意はしますが（笑）。でもそれは入口なのです。観光というのはそういう事なのだろうな、と考えています。